

附属と大学の連携—教育相談分野における連携を中心に—

センター研究員（東京大学大学院教育学研究科教授） 近藤 邦夫

教育相談分野における附属と大学の連携は、①教育学部付設の「心理教育相談室」と附属との連携の時代と、②附属学校内に心理教育相談室の分室とでも言うべきカウンセリング・ルーム（正式には、学校臨床総合教育研究センターの分室）が設置された時代、の二つにわけて考えることができる。二つの時代に密接に関わってきた者として、これまでを振り返り、これからの課題を考えてみたい。

1 附属学校と心理教育相談室との連携

教育学部内に付設された「心理教育相談室」と附属学校との密接な連携は、今から20年ほど前に始まった。明確なきっかけがあったわけではないが、要因の一つは、ちょうどその頃から不登校等の生徒の問題が附属でも頻発し始め、学校全体がある種の危機感を抱いていたことであった。そして、第二の要因は、牧、寺崎、稲垣という当時の歴代校長が、佐治守夫教授の後任として赴任したばかりの近藤に目をつけ、生徒の問題への取り組みという活動を通して附属と大学（学部）との間の連携関係を作ろうと積極的に動いたことであろう。私は、これらの3人の校長及びその後の浦野校長に頻りに声をかけられ、附属への協力を執拗(?)に依頼された。依頼の仕方には熱意と迫力があり、有無を言わさぬ雰囲気があった。学校とともに臨床は私の望みでもあったし、彼らの期待に私もなんとか応えたいと思った。

この時期に行われた具体的な連携活動は次のようなものであった。

- 1) 附属から依頼された生徒及び保護者の面接を心理教育相談室で引き受けること、
- 2) 生徒の問題の解決に関して、出来る限り、担任等と密接に連絡をとること、
- 3) 必要な場合には、学年の担任団と一緒に、問題への対応を考えること、
- 4) 多くの人に関わらねばならない難しい問題に関しては、プロジェクトチームを作り、合同で事例検討を行うこと、
- 5) 教員全体を対象とした、生徒の問題の捉え方に関する講義等を引き受けること、

等である。

これらの諸活動そのものの中に、問題をかかえた生徒へのケアを心理教育相談室にまかせてしまうのではなく、学校と相談室が、それぞれの持ち場で出来ることを精一杯しながら、それぞれの努力を噛み合わせていこうとする姿勢が感じられる。

過ぎ去った時代は良く見えるのかもしれないが、学校の側も、相談室の側も、一人一人の生徒の問題に誠実に取り組み、俗っぽい言い方をすれば、それなりに優れた治療効果をあげていたと思う。附属から依頼された問題の全てに関して、私は、親面接担当者あるいはスーパーバイザーとして関わったが、相談に当たる大学院生達も若々しい努力を傾注していた。私たちの側には「学校の先生達も一生懸命努力をしている」という信頼感があり、一方、学校の先生達の側でも「相談室はそれなりに頼りになる」という信頼感が生まれていたのではないかと思う。

このような連携を「生徒指導」の分野における連携とすれば、その後、「学習指導」の分野における連携を意図して佐藤学助教授（当時）が赴任した。彼は赴任当時に触れたこの頃の附属の雰囲気や附属と大学の連携の姿に深い肯定的な印象を受けていたようである。あの辛口の佐藤さんが言うのだから、ある熱気と信頼関係が我々の間に築かれていたのであろう。

2 私が学んだこと（1）

附属の先生方や生徒さんとの交流の中で、私が学んだことは二つある。第一は、一つの学校の生徒達の問題に集中的に関わることを通して、私が学んだものである。同じ学校に通う何人もの生徒と出会っていると、生徒がかかえる問題と学校の文化との間の微妙な関係、言い換えれば子どもの問題の背景にある組織の問題が見えてくるからである。「自分の頭で考え、自分の足で歩く」ことを重視するこの学校の文化の中にあっては、学校のこの要請に応えられる生徒達は惚れ惚れするような個性的成長を遂げていく。しかし、受動的なライフスタイルを身につけてきた一群の生徒達は、この要請に応えることが出来ず、身動きできずに困惑感だけを強め、不登校状態

に陥っていくことがある。このタイプの子ども達から私が頻繁に聞いた言葉は、「先生達は何もしてくれない」「何も教えてくれない」「何を聞いても、『自分が好きなようにしたら』と言うだけ」「先生達はいったい何のためにいるの?」「あれでは先生がいる意味がない!」という激しい訴えであった。「先生が何らかの指示を出し、生徒はそれに従っていく」という空間の中でならば動けるというスタイルを深く身につけた子ども達が、「自分の頭で考え、自分の足で歩く」ことを求める空間いきなり放り出されて茫然自失状態に陥っている痛々しい姿に、私は何度も触れることになった。

同時に、自立的なあり方への要請に応えようと焦りながら、それに必要な内的条件の伴わない生徒達は、自立的な生徒達の一部が示す逸脱的な行動（酒、煙草、夜遊び、外泊、危険な臭いのするたまり場への出入り等）の「かたち」だけを真似して、疑似的自主性とでも言うべきスタイルを身につけ、やがて学業への関心を失い、留年等の状態に陥っていくという構造があることも分かってきた。このタイプの子ども達の振幅の多い混乱した行動から私がいつも感じていたことは、『自分』というものをしっかりと持ち、惚れ惚れするような個性的成長を遂げつつあるあの友人達のように、私もなりたい!」「でも、私はどうしても『自分』というものが掴めない!」「どう足掻いても、それが見つからない!」という激しい苛立ちと焦燥感であったと思う。

学校の先生達は、「自分の頭で考え、自分の足で歩く」という学校の要請に応じて惚れ惚れするような個性的成長を遂げていく生徒に目を向けがちであり、一方、相談室の中で特定の子ども達だけに会おう私達は、このような学校文化の「影」に目を向けがちであるが、一つの学校の「光」と「影」の両方を視野の中におさめながら、学校全体として子ども達への適切な関わり方を模索していくことに、学校の教師と心理臨床専門家がどのような協力体制を築いていけるのか、それがその後の私の大きな課題になった。

3 私が学んだこと（2）

附属の先生方や生徒さんとの交流の中で、私が学んだことの第二は、学校の中にある様々な人的資源の多角的な協働や、授業や学習の果たす重要な意義を、一人一人の生徒への関与を通して具体的に学んだことである。一人の生徒の問題解決にいろいろな人がいろいろな角度から関わることも、そして授業という独特の営みの中で生徒の問題が癒されていくということも、私が「相談室」という限定的な場で会おうことのなかった、学校にしか

ない独自の臨床的なシーンであった。

例えば、性的同一性をめぐる内的混乱と対人関係上の痛手から長期間の不登校状態に陥っていた女生徒に対して、「担任」（中年男性）は彼女をめぐる学級内の対人的トラブルを辛抱強く見守り続け、年輩の「養護教諭」は女生徒の深い性的な象徴表現（箱庭上での）を黙々と受け止め、「校長」は頻繁に校長室を訪れるようになった彼女と爽やかな猥談を交わしながらお爺ちゃんの役割を担い、若い「級友達」は留年した彼女を「先輩、先輩」と呼んで温かく支え続け、一方、学部附属の相談室の中では、若い「大学院生」（女性）が女生徒からの嫉妬と羨望のこもった激しい罵倒を浴びながら適切な距離を置いて彼女との付き合いを続け、その後を私が親面接担当者としてモタモタとフォローしていくという構図の中で、いろいろな人がその人にしかできない独自の役割を果たしつつ、それらの全体がうまく噛み合っただけの一人の生徒の中の様々な葛藤を癒していく、という種類の過程を幾度か経験した。例えば、性的同一性の混乱という「葛藤」に焦点を絞れば、この時の彼女が、年輩の母性的な「養護教諭」、洒落な雰囲気漂わせたお爺ちゃんの「校長」、若い美しい女性の「大学院生」という「様々な役割」を果たす3人と出会い、彼らとの関係を維持できたことは、彼女と周囲の人たちの間に生まれた絶妙なconstellationとも言える。同時に、激しいいじめという「内的な被爆体験」の中で「生きる希望」を失いかけていた彼女に「生き続けること」への決意を促した決定的な契機は、「特別学習」で訪れた広島語り部（被爆者の老女）の「生きていて良かった。生きることは正しいと思う。」という言葉だった。「被爆者体験」を特別学習のテーマに選ぶことに迷い続けた彼女を柔らかくこのテーマに이지ない、老女との出会いの過程を（ハラハラしながら）見守っていたのは、中年の女性教師であったが、この教師の働きかけと女生徒の経験は、授業の中で生ずる学習経験が生徒の深い内的テーマに触れ、生徒の成長の契機となることに、私の目を開かせた。「相談室」の中で出会ってきたことと「教室」の中で起こることが、私の中で自然に繋がっていった。

図1は、性的同一性の混乱という「葛藤」に焦点を当てて、当時の彼女のまわりにいた様々な人的資源を「性別」と「年代」の観点から整理したものである。年輩の養護教諭と校長は、彼女から見れば「お爺ちゃん・お婆ちゃん世代」に属する人たちである。お二人には大変失礼な言い方になるが、性的な臭いの消えたこの世代の二人に対して、彼女は性的な葛藤と関心を最も安心して表現していたことになる。養護教諭には箱庭の象徴的表現

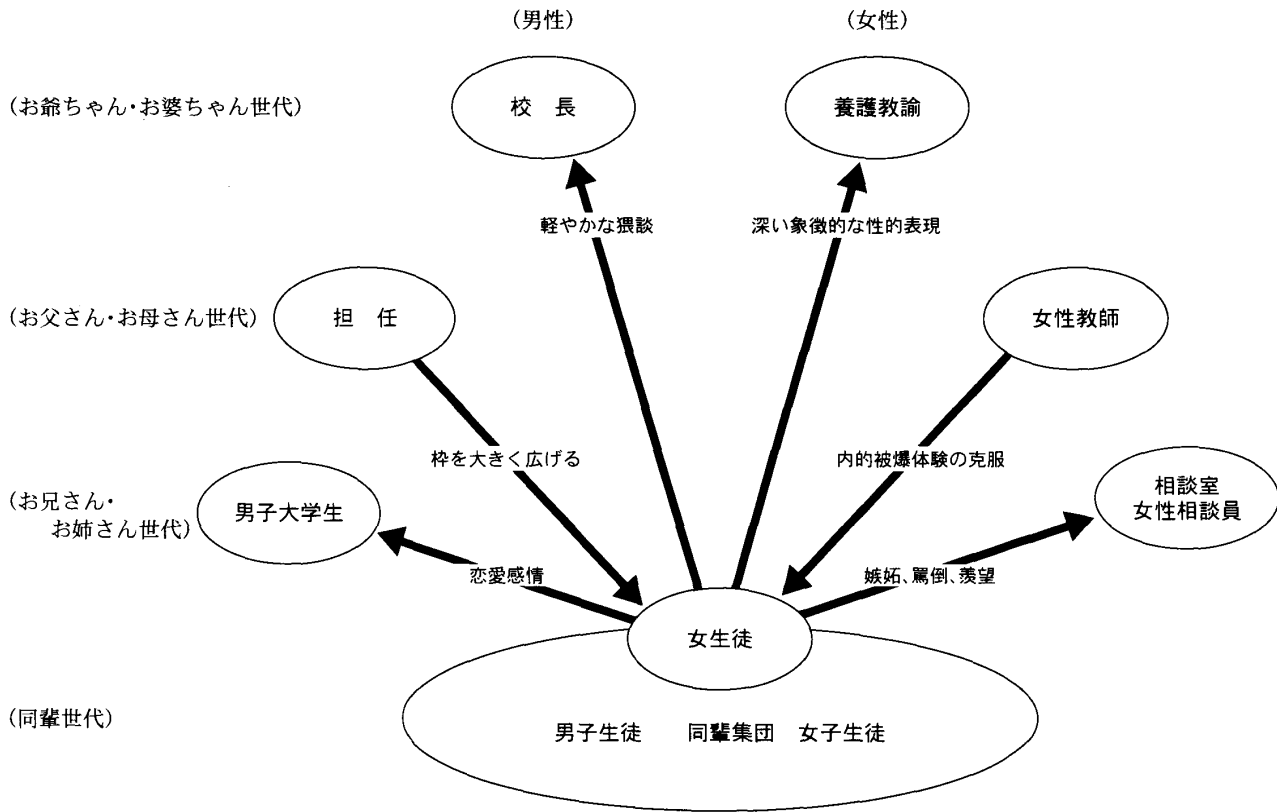


図1 女生徒をめぐる人的資源

を通して最も生々しく、そして校長との間ではそれを「爽やかな猥談」というオブラートと笑いに包んで…。一方、彼女の両親とほぼ同じ世代に属する中年の担任教師（男性）と上記の女性教師は、彼女の世界の中では、性的にはニュートラルな意味合いを与えられている。二人は、性的にはニュートラルな「大人」あるいは「教師」としてあらわれてくる。詳しくは記さないが、性的なテーマをめぐる両親に対して激しい嫌悪感を抱いていた彼女の感情世界を、この二人の教師は見事に中和する役割を果たしていたことになる。そして、「お兄さん・お姉さん世代」に属する、若い女性カウンセラーは、女生徒が望んでいた女性像をそのまま体現している女性として、嫉妬と羨望のこもった激しい罵倒を浴び、ある時期には相談室で会うことも拒否されていたが、カウンセラーは女生徒との間に適当な距離を置きながら、折に触れて柔らかくさっぱりした言葉を記した絵葉書を送り続け、二人の関係を細々と保ち続けていた。女生徒は、この絵葉書を大切に保存し、葉書の文面ににじみ出る女性的な柔らかさや細やかな心遣いを、次第に学んでいくことになる。私がインテンシブに関わっていた頃は、この図の中の「お兄さん・お姉さん世代」の左側、つまり「お兄さん」に当たる存在は出現していなかったが、学校での生活が軌

道に乗った高校生活の後期には、担任教師（男性）に「魅力的な女性とはどういう人か？」と尋ね、さらにその頃付き合い始めた男子大学生とのデートの仕方を尋ねてきたという。この男子大学生が「カレシ」あるいは「お兄さん」に当たる存在であったとも言える。そして、彼女を取り囲む同輩集団は、小さな葛藤はあったが、基本的には、同輩の女性同士の付き合い方や異性との付き合い方を学ぶ場として機能していたようである。

彼女を取り巻く人たち全体をこのように俯瞰してみると、どちらかと言えば男性的な荒々しい生き方を身につけてきた彼女が、激しい混迷を経て、女性としての自分を受け容れ、新しい生き方を学ぶために、絶妙な人的布置が形成されていたことがよく分かる。学校の中の臨床は、このように、いろいろな人がいろいろな角度からいろいろな手助けをして一人の生徒の成長を支えるというところに、重要な特徴があると言える。

4 附属学校と附属学校内相談室（ほっと・ルーム）との連携

1997年、教育学研究科に学校臨床総合教育研究センターが新設され、翌98年に、同センターの分室として、カウンセリング・ルーム（通称：ほっと・ルーム）が附

属学校の中に設置された。「スクール・カウンセリング活動を通しての学校支援方略の開発研究」というセンターの相談援助部門の研究を附属の教員とともに探求する拠点として設けられたものであるが、これは同時に、心理教育相談室の分室を附属学校の中に作って欲しいという附属側の長年の要望に応えるものでもあった。前述の「附属学校と心理教育相談室との連携」が、附属学校と（附属学校の外にある）相談室との連携であるとすれば、この時期からの連携は、附属学校と（附属学校の中にある）相談室との連携ということになる。

相談室が学校内に設けられることによって生まれるメリットは無数にあるが、しかし、相談室と学校の距離が縮むことに由来する難しい問題も多々あらわれる。この問題の原点は、相談室が学校の中に存在するために、相談室の運営が「学校の秩序」「学校のルール」「学校の組織原理」の影響をモロに受けることにある。あるいは、相談室が学校の中に存在するために、学校のもつ「教育」の原理と相談室のもつ「治療」の論理がモロにぶつかる可能性が増えることにある。異質の原理に拠って立つもののなのに、学校教育の原理への一体化を迫られることにあると言ってもよい。

例えば、私は子どもとお茶でも飲みながらゆったりとくつろいで話をしたいと思うが、それは「校内での飲食の禁止」という学校の規則に抵触する。子どもが気に入っている漫画やゲームがあれば、私は、それを持ってきてもらって、一緒に読んだり遊んだりしながら交流を深め、漫画やゲームを通して子どもが生きている世界をより深く知りたいと思うが、それは「学校に漫画やゲームを持ってきてはいけない」という学校のルールに違反する。学校の外にある相談室の中であればごく自然にできることであるが、学校の中の相談室ではそうはいかない。それを強行すれば、教師達が努力を重ねて築いてきた「学校の秩序」を足下から崩すことになりかねない。カウンセリング・ルームは「学校の中の治外法権の場なのか？」という、教師達からしばしば発せられる疑問と批判は、このような文脈の中で生まれるのであろう。

学校の外にある相談室であれば、子どもは、教師に内緒で相談に行くこともできる。しかし、校内の相談室では、誰が相談に行ったかという情報は、見たり聞いたりすることによって担任教師の目と耳に容易に入りやすい。

「あの子はどのような相談に行ったのだろうか？」「私にできることはないだろうか？」と教師が考えるのは当然である。自分が担任をしている学級の中から多くの子ども達が相談に行っていることを知れば、「彼らは何を話しているのだろうか？」「私の悪口を言っているのだろうか？」と心穏やかでなくなることもあろう。「あの子は何を悩んでいるのだろうか？」「担任としてできることはないだろうか？」「担任として気をつけなければいけないことはないだろうか？」と、カウンセラーに尋ねたくなるのも当然と言える。カウンセラーは、「子どもが私だけに漏らした心の秘密を大切に守りたい」という思いと、「できれば先生方と力を合わせて子どもの成長をはかりたい」と思いの間で引き裂かれる。カウンセラーの対応には大きなバリエーションがあると思うが、秘密を守るように傾けば、教師にとっては愉快なことではない。「私たち教師は、子どもの問題解決のためにカウンセラーと力を合わせて働くコーワーカーではないのか？」「もしそうなら、カウンセラーが学校の中にいる意味はないではないか？学校の外にある相談機関のカウンセラーと同じではないか？」という疑問と批判が生じるのはこのような文脈においてであろう。

学校の営みと相談室の営みを同じ場の中で行うことは、実は、容易なことではない。解決不能な問題ではないが、異質の原理のぶつかり合いを通して生産的な展開をはかるためには、両者の間の率直で深い、そして辛抱強い対話が必要である。

一つの学校の中にカウンセリング・ルームを設置する場合には、本当は、「何故それを設置するのか？」「カウンセラーに何を期待するのか？」「教育活動と相談活動をどのように噛み合わせていくのか？」「学校のスタッフとして、教師とカウンセラーはどのように協働していくのか？」に関する緻密な議論が教員集団の中で行われることが望ましい。センターの分室を附属学校の中に新設する過程で、そのような議論を附属学校側でしていただく時間的余裕を提供できなかったことを、私は初代センター長として誠に申し訳なく思っているが、設置から4年経過した今、再度原点に戻って、附属の教員集団と大学の間で、率直な討論を行い、納得の出来る構図を作り直していただきたいと切望している。